

書評

藤岡換太郎著「見えない絶景：深海底巨大地形」
講談社ブルーバックス, 254p, 2020年5月20日発行
1,000円(税別), ISBN978-4-065-17904-8

「しんかい6500」を生でご覧になったことがありますか? あれはすごいですよ。パイロット, 研究者の総勢3名が直径2mの球のなかで8時間。もちろん, トイレはない, 途中で「ちょっと, ごめん」という感じでどこへも逃げ出せない。

評者はこれまで一度だけ, 「しんかい6500」を搭載した母船「よこすか」の航海に参加する機会に恵まれましたが, 「しんかい6500」での潜航者を決める会議では, 最後まで手を挙げる事ができませんでした。ちっぽけな潜水艇で漆黒の水深数1000mまで落ち下る恐怖もありますが, 閉所に3名で8時間閉じ込められるストレスはとても耐え難いものを感じられたのです。「おまえの科学に対する情熱・覚悟はそれぐらいのものなのか」という声も聞こえてきそうですが, 正直「はい, 残念ながら。」と答えるしかありません。

本書の記述によると著者藤岡換太郎氏は, その「しんかい6500」に51回乗船されたい。大先輩に大変申し訳ないが, もうなんというかネジが何本か飛んでいるとしか思えません。そう, 本書は, いっちゃっているオヤジによって書かれたと思ってよい。

藤岡氏は2012年以降, 講談社ブルーバックスだけでも、『山はどうしてできるのか』『海はどうしてできたのか』『川はどうしてできるのか』『三つの石で地球がわかる』『フォッサマグナ』, そして本書と立て続けに6冊も著している。これは, 科学啓蒙書としては, とんでもないハイペースといえよう。

松尾芭蕉はおくのほそ道の旅のあと, 原稿用紙にして30枚弱の作品に対し, 推敲に推敲を重ねたこと5年間。そして脱稿の年, 世を去ってしまう。一方, 同時代のライバル井原西鶴は一日に22,500句に及ぶ俳諧を即興的に作り上げた。また, わずか100句程度の句に何年も推敲を重ねることの愚も説いている(キーン, 2007)。

藤岡氏は, 西鶴並みの軽やかさで, 通常の研究者であれば二の足を踏むようなトピック(論文を書きにくい), もしくはもう当然のことと思ひ込み, 普段は考えることすら忘れてしまっている地球科学の諸問題の

数々(例えば, 第2章, 第3章に納められた, 巨大地形はなぜ深海底に多いのか, 海溝はなぜ太平洋に多いのか, 海嶺はなぜ長いのか, 東太平洋海膨はなぜ東に寄っているのか, プレートテクトニクスはいかにして始まったか等々)に果敢に攻め込んでいる。読者としても, 西鶴作品を楽しむつもりで, もしくは今はじめて目の前で生を受けたジャズを楽しむつもりで換太郎作品に対峙すべきなのだろう。なんでもかんでも「論文にしなきゃ」と考えてしまう不自由さから一時でも解き放たれ, 新しい視点を獲得できれば非常に有意義と言えるだろう。

なお, 本書の最大の見どころは, なんとと言っても「第1章 深海底世界一周」である。著者が大きな影響を受けたヴェルヌの『海底二万里』に敬意を評し, 仮想の潜水調査船「ヴァーチャル・ブルー」による世界一周の旅, という趣向を取っている。先にも書いたが藤岡氏は「しんかい6500」で51回潜航した猛者である。時代背景等を考えても, 一個人がそれほどの潜航機会を得るといことはもはやあり得ず, 最初で最後のサビエンスといえるだろう。それも並みはずれた観察眼を持った。この第1章ではその経験を十分に生かし, 自身が目撃した深海の様子を抜群の臨場感とともに届けてくれる。

最後に, 本書評を読んで私を弱虫だと思ったそのあなた! ぜひ横須賀のJAMSTECへ行って下さい。実物大の「しんかい6500」模型が展示されています。それを眼の前にして「えっ, このなかに3人で8時間。それはちょっと・・・」と思ったら, こっち側の人です。ヴァーチャル潜航に留めておく方が無難ですよ。

引用

ドナルド・キーン(2007): 芭蕉における即興と改作。「おくのほそ道」, 講談社, 東京, 76-92.

(茨城大学 伊藤 孝)

2020.6.12 受付

2020.6.24 学会ニュースレター公開

2020.6.25 学会ホームページ公開